

小学校では、外国語の学習を通して、英語で何を知ることができ、どんなことができるようになったかといった自己の変容を自覚し、「主体的に思いを英語で伝えようとする子どもの育成」をめざしたい。なぜなら、思いを伝えようとするのが、問題解決の第一歩になると考えるからである。そして、小学校段階での学習が、中学校での外国語の学習の中で、やりとりを通して問題を解決することにつながってほしい。そこで、以下の点を意識して学習を進めた。

- ア) 即興的に質問をできるよう、支援を繰り返し行うこと
- イ) 自覚した自己の変容を、子ども同士で共有すること

### 1 単元名 英語でフリートーク ～Let's talk about my dream.～

『We can!2』 Unit8 What do you want to be?

### 2 単元のねらい

児童は、毎時間の導入時に、Small Talk に取り組んでいる。教師が子どもたちの生活や学習内容に合わせて設定したトピックで、子どもたちは英語での会話に楽しみを見出しつつある。しかし、まだ、英語で自分のことを話すことに不安を感じている児童も少なくない。ある日の、朝の会で行っているフリートークの振り返りをしていると、ある子どもが、「Small Talk で学習した語彙や表現を使えば、朝の会で行っているフリートークを英語でもできそうだ」と思いをもち、その子どもが他の子どもたちに伝えた。そうすると、他の子どもたちは、その提案に反応を示し、1年生から行っているフリートークを英語でやってみようということになったのだ。話題については、外国語で行っている学習の中から選ぶということで、本単元のUnit8「What do you want to be?」で、英語のフリートークを行うこととなった。互いにもっている夢や目標を、ほとんどの児童が知らない。日本語を通じて、夢や目標を知り合う機会がないため、「What do you want to be?」「I want to be a～.」の表現を用いて、自分の将来について伝え合う活動に取り組んだ。子どもたちは、英語で会話をするからこそ、心を寄せて聞き合う姿や、互いの夢や目標を知ること、自分の将来についてもう一度考え直す姿を見取ることができた。以下は、単元を構成する際に意識した2つの点(ア、イ)に対して行った支援から表れた、子どもの姿である。

### 3 授業の実際

- ア) 即興的に質問をできるよう、支援を繰り返し行うこと

毎時間導入時に行ってきた「Small Talk」で用いた語彙や表現をまとめた掲示物を、教室前面に掲示し、それらを参考にしながら会話をするよう促した

前述したように、子どもの中には、英語で会話することに不安を感じている子どももいる。子どもたちの目のふれるところに掲示してあることで、会話の内容に応じて、掲示物の表現を見ながら、表現を自由に選択し、会話を続けることができるようになってきた。

これらの質問は、子どもがSmall Talkを進めていく中で、子どもが必要感をもった質問である。「本当は、もっと好きな色を見たかったけれどどうやって尋ねたらよいか分からなかった」や「相手の得意なことを聞いたかったけれど、どうやって尋ねたらよいか分からなかった」などの疑問に、ALTが英語でする質問を教えた。それらの質問を集めて、掲示にして示したものである。子どもは、「前習った質問の仕方が分からない」「毎回やるけれど忘れてしまう」という子どもの声に対して教師は、「どうしたらよいか。忘れないための方法はあるのかな」と、子どもたちに投げかけた。すると子どもは、「何か手元に質問の書いた紙がほしい」「ずっと目につくような掲示物が



ほしい」と教師に提案した。教師自身も掲示物は作成しなかったが、子どもの必要感がないのに、教師が掲示物を作成し、提示するのではなく、子どもが必要感をもつように、あえて2往復目に入る質問をしたくなるような Small Talk のトピックを提示し、子ども自身が質問をしたくなるのを待って、掲示物を作成し、示したのである。そうすることで、子どもたちは自ら英語の学習をマネジメントする意識も生まれてくるのではと想定した。そして、子どもたちは、「質問をしたかったけれどできなかった」と思いをもち、それらの表現を教師は掲示物として少しずつ増やしていき、子どもたちは、その掲示物に載っている質問を見ながら、少しずつ即興的に質問できるようになってきたのである。このように、与えられたものよりも、自ら求めて得たものの方が、子どもの学びにつながると思われながら、子どもと共に学習を進めた。

しかし、掲示物を参考にしようとしても、目の前の場面に応じて、どの表現を選んだらよいか分らず、1往復の会話で終了する子どももいる。1往復以上の会話ができるように、以下の2点で支援を加えた。

- ① 表現を選んでいる子どもが、選ばない子どもに、「あの表現が使える」をアドバイスしている姿を教師が見取り、価値付け、共有すること
- ② Plus one more question ができた子どもに、掲示物のどの表現を使ったのか問い返し、どのように掲示物を使って会話が1往復以上できたのかを共有したこと

① 子ども同士で表現の選び方を学び合う雰囲気をつくり、活用できる表現を増やすことにつながった。場面によって、使う表現は違うので、その時に選ぶ表現を、教師が一人一人の子どもたちへ助言して回るのは困難である。子どもたち同士で学び合う姿を見取り、価値付けることで、子どもたち自身で、表現を活用し、表現を増やすことにつながった。



② 同じ場面設定の中で、どんな表現を使ったのかを共有し、「次は使ってみよう」「次は〇〇くんのように質問してみよう」というような思いをもった。子どもたちが意識できるようになってきたのは、場面に応じて尋ねたいのが、「What」「Where」「When」「Which」「Who」どれなのかが、分かってきたことである。その姿として、「What 昼ご飯?」「Which 〇〇or〇〇?」など、「What」「Where」「When」「Which」「Who」が先に表現できるようになった。「この場面では、この質問が使えた」と繰り返しおさえることで、場面と表現をつなげて考えることができるようになった。そのような子どもの姿は、イ) で示すこととする。



このように、掲示物を利用しながら会話の内容に合わせて即興的に質問をしたり、相手に反応を返したりしている子どもを見取り、価値付け、子どもと共に学習を進めていくことは、有効であったと考える。

イ) 自覚した自己の変容を、子ども同士で共有すること

一時間の授業の終末に、思いを共有する場を設定した

以下は、英語のフリートークの一部の様子である。

※下線は、友だちの意見に対する質問

- T: I want to be a baseball player. I like playing baseball. H: What team do you like?
- T: I like Hiroshima Carp. K: What baseball player do you like?
- T: I like Seiya Suzuki. U: What Hiroshima Carp do...Hiroshima Carp uniform color do you like?
- T: I like blue and red. 限定のやつなんよ。

「like」を使った質問が中心だが、「ぼくたちにも英語でフリートークができた!」「難しいからこそ楽しいな」など、Small Talk の学びを生かして、朝に行っているフリートークが英語でできたことに、喜びを感じていた。以下に、英語でフリートークを行った後の子どもの思いを示す。自己の変容を感じている子どもの発言を「①できるようになったこと」「②もっとしてみたいこと」で下線で示す。

U児：質問がいつもの朝のフリートークより多かったな。

M児：今日は全体的に、お尋ねが多かったっていう感じで、逆にちょっと、時間が短かったから、少ない意見だったから、より深く知れたのは知れたけど、②もっと今日、意見が少なかったから、丸々一時間使って、やってみたい。

教師：あーそうだよな。だから全員の意見を聞きたいってことか。なるほどね。

N児：森重君と少し似てるかもしれないけど、なんか、今日やったときに、ちょっとまだ時間が、足りなくて、まだ、聞いてみたいこととか、なんか、たくさんあったし、最後の方になってバツて手が挙がったから②その人たちの意見も聞いてみたいと思って。英語だと、意味が分からなくなっても、①どういう意味かなとか、興味をもつことができ、すごい楽しかったからいいなと思いました。

T児：今日は、①発表のときにけっこう、お尋ねでも、すごく英語が使えたから、けっこう楽しかったです。

S児：いつものフリートークとはちょっと違う楽しみ方ができました。

C：うーん（全体が共感）

教師：いつもと違う楽しみ方ってなんですか？

S児：いつもは日本語でなんか、みんなの意見を聞いてから、なんて言えばいいん？ちょっといつもより違う。

C：なんかわかる。

教師：なんかいつもと違って、難しいんだけどなんか面白いなとか？O君はどう？今手を挙げてくれたけど、

O児：①日本語で話すよりも難しくて、その難しさが楽しかった。

C：あー。難しいからこそね。（全体が共感）

M児：今日一番盛り上がったのが、塚脇君のときのベースボールプレーヤーで、たぶん、みんなは塚脇君のよく知っているから、あんなにたくさん質問が出たから、知ってるものに質問が集まるんだな。でも、もうちょっと、②あれ(職業が英語で書いてある掲示物)を見て、また授業で、質問を考えたりしてもいいんじゃないかなと思いました。

教師：あれってどの掲示物？

M児：あれ。将来の夢が書いてあるやつ。一つ一つ(みんな)言っていったらいいんじゃないかな。

H児：②先生、別の時間でもいいから、またやりたい。全員の思いを聞いてないもん。

教師：もう一回したいのか。

C：はい。

教師：わかった。オッケー！

①の子どもの姿は、「できるようになったこと」を自覚している姿であると言える。日頃は日本語で行っているフリートークを、英語でやってみるということは当然、子どもにとって大きな壁となる。しかし、学んだ語彙や表現、小グループでの会話を通してだんだんと自信がつき、最終的には、英語で質問をしたり、自分の伝えたいことを伝えたりできるようになったのである。また、②の「もっとできるようになりたい」という子どもの姿も表れた。フリートークでは、「I want to be a baseball player.」と話した子どもに質問が集中し、5分間のフリートークがすぐに終わってしまった。一部の友だちの思いしか分からなかったので、「全員の思いを聞きたい」という思いが表れたのだ。このような、思いを共有する場を設けたからこそ、「別の時間でもいいから、またやりたい」という意識が表れたと考える。

#### 4 終わりに

「英語でフリートークをしてみたい！」という子どもの発想が形になるように、授業づくりを進めてきた。一時間の授業の中で、英語を聞いたり話したりする時間を多く取ることが不可欠であり、英語に触れる時間が長け

れば長いほど、自信をもって発話することにつながる。しかし、小学校段階では、中学校以降の英語の学習に意欲がもてるように、「英語を使って思いを伝える喜び」を感じさせたい。そのためには、英語に触れる時間を確保しながらも、英語を使う場面と、その場面を振り返る場を単元の中で設定をすることも大切にしたい。そうすると、「できるようになったこと」「もっとできるようになりたいこと」を自覚することにつながると考える。学習の中で、意欲をもって繰り返し英語に触れられるように、これからも研究を進めていく。